

中学校家庭科住居領域の指導内容について（その1）

-生徒の学習要求調査から-

○新井法子 高橋久実 湯川聡子（鳴門教育大学）

【目 的】男女共学となった家庭科の指導内容として「住居」は比較的男子向きの領域とみなされる。こうした意味で内容の再検討が必要となるが、男子生徒も含めた生徒の意向を探ることも大切であると考え、アンケート調査を実施した。

【方 法】対象は、都市群として横浜市と京都市の中学校あわせて3校(589名)と地方群として徳島県と宮崎県の5校(639名)の3年生である。アンケートは中学校「住居」領域として適当と考えられる10領域50項目の質問項目を作成し、そのうち学習したいと思う項目には○印を、学習したくない項目には×印を記入する方法で回答を求めた。調査は1995年7月～11月にかけてである。

【結 果】生徒の「学習したい」との回答が過半数をこえた項目は50項目中、14項目あった。支持が高かったのは「住宅の安全に関する知識を得る」という項目の他、インテリアに関する項目と自分の部屋（子ども部屋）に関する項目で、この2つの分野が支持を得た14項目の半分を占めた。逆に「学習したくない」との回答が過半数をこえたものは50項目中、12項目あり、気候風土と住まいの関係や居間や食事の場に関する内容などがあげられた。男女別には、女子はインテリアへの指向が強く、男子は住まいの設備の他、住宅の外側へと関心が向いている傾向がみられた。地域による大きな相違はみられなかったが、住宅事情の厳しい都市群の中学校では住宅の現状に触れる内容については拒否的であった。全体として生徒が望む学習内容と学習指導要領が指示する内容にはズレがみられた。